

て、赫々たる威力を放つ事は、これ當然の事でございます。」

悪魔の戦

「支那の國では、少し強い者は、忽ち悪魔に襲はれて、心に自我が満ち、他の勢力を倒し滅ぼし、その主権者の持てる力を、我が奪ひ、次々に之を繰返すために、戦の絶えた事はありません。」

このために計略、策略、嘘、盗み、貪り、虐げ、慘酷といふ事は、支那の主権者又それに従ふ軍の、當然の風習となつて居りますから、白晝に於いても時も所もかまはず、堂々と悪業が行はれて居りました。

國民に對して眞心からなる、慈悲情といふ様なものは少しもありません。ために田畑は戦のある度に踏み荒され、家は壊され、大切に思ふ衣類家具財寶など、總て

掠奪されるので、國民は軍を怖れるのみでなく、あらゆる方便の力、例へて申せば、嘘偽り虚偽隠蔽盗み貪りといふ事を、巧みに工夫して、他からの迫害の手を逃れ、自分の身と財産を守る工夫に専念して参りました。

ですから支那の國民としては、誠正直正しいといふ様な事を、言葉では申しましても、實行すれば一日半時も、その生命が生きて行かれない様に、國體が組織されてゐますから、初めて支那の正體を見た、外國の人々は、驚き呆れて終ふのであります。

しかし支那人から見れば、少しもそれは、不自然でも不思議でもなく、寧ろ當然と思つてゐます。

有りの儘の事を言つたり、正直な行をしたり、する人は一人もありません。

若し眞實言行一致の行をする人を見ると、不思議な人と、吃驚するのであります。

だから支那は、古來嘘と方便で築いて來た國體であり、又これが民族の個性習慣でありますから、他の國の民族と同じ様に考へると、非常な間違ひが起るのでございます。

全くある事もない様、無い事もある様に、誠しやかに話したり書いたりして、平気で居ります。

又事實を反對に話したり書いたり、報じたりする事も、極めて巧みで、支那人の本體を知らぬ外国人は、初めて支那人に逢ふと、一度は必ず欺かれるのでございます。

同じ買物をするのにでも、よく氣をつけないと恐ろしい懸値を申しますから、うつかり言ひ値で買はないこと、又偽物を本物とごまかす事が上手でありますから、充分氣をつけて、よく

品物を調べて買ふ事などに、始終心を配つて油断をしない様にしなければなりません。かうした性格を持つ支那人を相手にして、真心から交際し、商品取引をするのには、二重三

重の苦勞を要します。

これがために支那は、世界文明から取殘されて、國は大きく、人口は多數住んでゐても、今日迄國が圓滿に統一もされず、世界の弱體國不統一國家として扱はれ、國民は非常に不幸な境遇に置かれて參りました。

そののみでなく、最近迄も戦争は絶えず繰返されてゐました。

「最近の戦争では誰と誰とが戦つてゐましたのでございますか。」

「今から約三十年前、清朝滅びてからは、しつかりした國の統一者がないので、又色々な權力者が各地に現はれ、一定の土地に分割して自分勝手に政府を立て、國民から税金を取立て、自分の勢力の擴大を計り、絶えず他の權力者と競争してゐたのでございます。

滿洲でも清朝亡びてからは、偉大な權力者がないので、張作霖といふ、馬賊の頭目が、主權者となり、滿洲國を統一し、民心を治めるといふのは言葉の華で、實は國民の生活を脅し、夥しき税金を課して、弱い國民の血と涙と汗を搾り取り、自己の勢力の擴大に努め、萬里の長城を隔て、支那の本土に勢力を張つてゐた人々と戦つてゐました。

所が日本は日清日露の戦争以來、滿洲に當然の權益を得て、滿鐵の經營を始め、各地に色々な事業を行つてゐますため、澤山の日本人が渡滿して、日滿人協力して働いてゐる關係で、滿洲國を治めてゐる、張作霖の政權を出来るだけ助けてゐました。

これがために張作霖は思ふまゝ、自分の勢力を滿洲に揮ひ、軍備も次第に充實して來ました。かうして勢力が擴大して來ると、支那本土の主權者達と、執拗に戦つてゐましたが、勝つたり負けたりして、勝負は却々つきません。

その中に張作霖は戦ひ飽んだものか、急に心を翻し、支那の主權者と戦ふよりも、日本の國に反抗して、日本の權益を奪ひかへした方が、利益が莫大だといふ様な間違つた考へを起して、充實した軍備を、日本軍に向けて日本の勢力を滿洲から取除かうといふ様な、間違つた政策を取り初めましたので、忽ち天罰が下つて、奉天で爆死して終ひました。」

王道樂土

「父がかゝる恩を仇で酬ひる様な、迷朦な人間でありますために、その子の張學良も亦、父の子として、誠に適應しい不明な人でありますから、父のこの天に誅せられた、無殘な最期を見て、

翻然心を改めて、日本に誠意を示し、協力指導を受けてゐれば、國も治り、その地位も保たれたのであります。が、學良も亦、明智に缺けてゐますため、父張作霖滅亡後はいよいよ父にも勝る程、野心を逞うして、滿洲に於ける、日本の權益を掠奪しやうとのみ計り焦り、遂に支那の主權者と和を講じ、共に意志を通じて、滿洲支那協力して、日本排斥、權益掠奪の手段方法を進めたのでございました。

そして神の國日本に對し、數限りなき強慢無禮を働きました。が、正義の國日本は、弱者を虐め苦しめる事を好まず、飽迄清く正しく大いなる、慈悲心を以て、その不明を悟らしめ、觀念行動を改めさせて、行く／＼東洋亞細亞の國土の安定と平和と民族の幸福のために、力を盡し度いといふ、聖大な思想から、出来るだけ支那及び學良の無禮不遜を咎めず、忍耐して居りました。

すると彼は、かく迄に日本人を辱しめ虐げ、その權益を蹂躪しても、尙何とも言ひ得ないのは、日本の力の弱いために、考へ違ひをして、侮る心が増長したゝめに、昭和六年九月十八日

張學良は部下に命じて、柳條溝なる、日本所有の滿鐵を破壊させ、公然と挑戦しました。め、日本軍は權益擁護の立場から、僅かの軍を以て、萬餘を數へる、北大營の張學良の軍始め、各地の兵營に在つて、日本國民、排撃のために、跳梁する、非道嗜味な軍閥を一舉に討伐し、續いて滿洲國全面に渡つて、古來純良な國民の生活を脅かす、匪賊馬賊を殲滅して、滿洲全土を安定しました。

滿洲民族は手の舞ひ足の踏む所も知らぬばかりに狂喜しました。

そして清朝の宣統帝であらせられた、溥儀氏を滿洲國皇帝として仰ぐべく天津から仰へ奉りました。

そして年號を康徳と定め、國號を滿洲國として、今の大滿洲帝國を建設したのであります。かくして今や滿洲國は、東天から旭の輝き昇る如き勢で、日増に國の力が伸びて居ります。ために、滿洲國民は、數千年來の因習から醒めて、眞に正義の國なる、日本國民と眞心から相提携し、誠と愛と正義を心と行の約束として、正しく生きるために、輝かしい王道を力強く

踏んでゐます。

今後數年數十年後には、過去以來の誤れる因習は自然に消滅して、眞に清々しく、正しい大國民性が發揮されるのでございませう」

運命の子

「張學良は滿洲を追はれてから、どういふ運命を辿つてゐるでございませうか。」

「張學良は滿洲に在つてこそ、英雄豪傑として、威張つて居られますが、支那へ追はれてからは、誠に惨めな境遇に置かれ、自ら中央政府なりと旗印を上げて、相當な權力を近頃振ひ初めた、蔣介石からも、厄介視されるのであります。

それでも學良は相當な資産と、數十萬の軍を持つてゐますから、うつかりして、支那の本國で暴れ出されると、取鎮めるのに困るといふので、蔣介石も眞正面から學良を排斥するといふ

事はせず、色々な名目で學良の體面を保たせ、何時となし侵入して來た共產軍を防ぐ、總司令を命じたりして、巧みに學良を利用して居りました。

學良は又、日本軍のために、滿洲國から追はれた事が残念で堪りませんが、自分の軍隊だけの力で滿洲を取返す事は出来ませんので、蔣介石初め、その他の將軍達に言葉を盡して縋りますが、誰も相手になつて助力して呉れませんので、失意落膽その極に達しました。ために、日々鬱々として樂しません、天を怨み地を怨み、日本を怨み嘆いて居りました。

そして果ては蔣介石始め、支那本土にある各將軍達を怨んで、苦惱の數年間を、河北に送りました。

鋒先を變へて

支那は國土が大變廣いのに、定つた主權者もないため、國の中が少しも統一されず、いつも

別れ／＼で、彼處此處に、主權者があつて、思ひ思ひに政府を立てゝゐるといふ、變つた國柄であります。土地はよく肥えて、天産物に富み、金銀銅鐵石炭等も、河北省邊りでは、無盡藏といふ程埋藏して居ります。

ために、世界の國々は、お互に自國は廣い國土を持つてゐ乍ら、尙も早くから東洋の支那の國土に、否その天産物に目をつけ、巧みな手段方法政策に依つて、支那の要人に取入つて、國土を手に入れる一方、權益を得やうと競争して居りました。

これがために支那の海に面したよい土地は、大方外國人に、租借の名義で權益を奪はれて居ります。

これがために、數十年前國民が極度の排外思想から、義和團といふ團體が暴動を起し外國人を國土から排撃しやうとしましたが、却つて各國のために、征服させられて、一層大きな權益を獲得されて終ひました。

香港を英國に領せられた動機はと申しますと、英國は印度の國を巧みな政策で、己が屬國と

し、そこから收穫される阿片を支那に賣込まうとしましたが、支那がこれを拒んだため、支那を攻めると言ひ出し、遂に支那が英國に敵しない事を知つて謝罪すると、その代償として香港を求めたために、遂にその所有となつたのでした。

その他同じ様な手段で、各地の權益や領土を、外國に奪はれてゐますので、支那では常に残念だと思ひ續けて居ります。

そしてよき折もあらば、諸外國の勢力を取除き、權益や領土を、自國の手に取戻し度いと焦るのは、當然の感情でございます。

しかし國の力が弱いためにその目的を達する事が出来ませんので、色々考慮した結果、今度は鋒先を變へて、一番支那の國を守るのに、大切な守護神にも等しい日本に對して、挑戦して參りました。

「支那はごういふ理由で、大恩ある日本に反抗を始めたのでございますか。」

「それは支那の國民性の然らしむる所で、無知蒙昧と言はうと不明と言はうか、その心境に到

つては、哀れむべきものがあるのでございます。

支那が兎に角、今日迄、全國土を世界各国に分割されず、僅かの權益領土を奪はれたのみで、國土の維持が出来たのは、背後に日本といふ限りなく強く正しい守護國が嚴然として控へて、正義の利劍を輝かしてゐた威力のお蔭でありました。」

誤れる政策

「義和團事件の時もその後にも、時々諸外國は、支那の國土を分割するといふ様な案を持出しましたが、その度に日本は嚴然として、之に反對し、飽近支那の國土は、支那國民の國土でなければならぬ。

と正當な主張をし續けました。爲に、外國も強ひて分割する事も出来ないのです、何處の國も支那の國を自分勝手に領土にするといふ事はしない様にといふ、條約を結んで、今日に及んだの

でございます。

だからこそ支那の國土は、四面猛獸に狙ひ奇られ乍らも、兎も角今日迄奪はれずにもたのであります。

滿洲も清朝始つて以來、内蒙古外蒙古と共に、支那の國土と等しく見做されて參りましたが、滿洲は日清戦争の後、全部ロシアに奪はれて終つてゐたのを、日本が斷乎たる利劍を揮つて、傍若無人な露軍を北滿へ追拂つて、滿洲を取返して支那に與へたのであります。

そのみでなく支那本土迄もロシアの恐ろしい毒牙にかゝつて、國を奪はれやうとしたのを、未然に防いで救つたのでございます。

朝鮮の國は古來獨立國で、神功皇后御征韓後は日本の屬國となり、最近日本は日本の保護國でありました。

それが日露戦争直後に、自發的に日本に併合する事を申出で、日本の政治を受ける様になり、國土は日本の國土となり、國民は日本の國民となつたために、今の様に結構な政治を受けて、

到る所文化が進み、教育も僻地迄よく普及して、國民は非常な幸福を得る様になりました。

臺灣はもと、支那の領土でありましたが、日清戦争の時支那は日本を侮り、戦争をしかけ、その結果は大敗して、日本軍に攻め込まれ、捨て、おけば帝都北京城迄奪はれやうとしました。ために、政府は周章狼狽して、日本軍に降り、只管和を乞うて、我から進んで遼東半島並びに二億兩の賠償金と共に日本の領土として譲り渡した、開けない島でありました。

日本は本國が餘り廣くないため、臺灣を開拓して、野蠻で無知蒙昧な土民を懇ろによく教育し、文化の施設を洽く行渡らせ、今日の様な住みよい島に致しました。

遼東半島は支那から日本へ讓渡すといふ條件で、日清和睦條約締結後、ロシア、ドイツ、フランス三國の干渉問題が起つて、一時支那へ還付したもので、一旦日本の手へ收めたものが、又支那の手へ戻つたのであります。

かうした歴然たる過去の事實を見ましても、支那は自分の手で治める事も出来ない、僅かの島を日本へ提供したのみで、永年自國が世界から分割される運命を、斷乎として退けて貰ひ又、

各國から魔の手伸びるのを監視し保護して貰つた、大恩ある日本國でありますから、國民は舉つて日本を敬ひ、尊び、日本國民の正義を信じ、一層強力な保護を乞うて、國本の安全と、國民の幸福を計るべきが、當然であります。

それですのに、事實は全く反對で、世界を相手に、排外思想を高潮する事を止めたかと思ふと、今から凡そ二十年程前から、日本一國を敵として憎む様になりました。

日清戦役、日露戦役後には、支那國民は非常に日本人を尊敬して、日本人が支那へ行つて、貿易をすると言へば、土地の知事市長有力者が、自ら迎へて此處彼處と案内し、日本人のために便宜を與へて、支那と圓滑に貿易の出来る様に取計らひました。

そののみか政治も、教育も軍事も宗教も工業も、皆日本から指導者を招聘して、その教へを受け、又若い青年達を、日本の中等學校高等專門學校大學校、又幼年學校や陸軍大學軍隊などへ托して、日本の教育を受けさせ、眞から日本と協力の實を擧げる事に努力致しました。

ために支那や滿洲へ行つてゐる日本人も、非常に愉快に働く事が出来て、骨折甲斐があり、

支那の國民が日本へ來ても、日本人と親しく交つて商賣をし楽しく暮す事が出来たのでございしました。

それが今の中央政府の首席である、蔣介石が日本から歸つて、青年士官として、又政治家として頭を擡げかけてから、日本の國體にあこがれて、支那を自分の手で統一し、皇帝になれば、大統領にならうといふ様な理想を持つ様になりました。

それには外に同じ様な力を持つ將軍や政治家が澤山あつては、都合が悪いので、何とかして全國に跋扈してゐる、數多の將軍達を、討伐する事が出来なければ、我が主權下に治めて統一しやうと考へ、色々と策略を巡らして、各地の將軍達に働きかける一方、四百餘州の國民の心を統一して、一つ力に集中するのには、誰もが一致して賛成する目標に依らなければならぬと考へついたので、蔣介石の排日抗日教育であります。

亡國の種

「蔣介石は、自分が皇帝になり度い、支那の大統領になり度いといふ、大それた野心から、大變誤つた考へを起し、支那に取つても、自分に取つても、大恩ある日本の國に向つて、敵對思想を持たせる様に國民を教育して、思想を統一するに限ると、淺墓な考へを起しました。そして自分の地位が次第に高くなり、國民から智者賢者英雄と尊敬されて、重要な地位を得る事が出来る、その地位を利用して言葉巧みに、支那の國家を思ふ、忠實な人格者らしく装うて、あらゆる權威者を籠絡して、先づ教育界に手を入れ、幼稚園小學校、中等學校、各大學の教科書に、排日思想濃厚な教材を選んで載せ、教育者も極めて排日思想強い者ばかりを選んで就職させ、いたいけな幼児から、天真爛漫な青年男女の、何も知らない人達に、極めて惡質な排日抗日教育をすると共に、成人教育の名を以て、映畫に新聞紙上に雑誌上に、演劇に、あらゆる方法を以て、排日抗日宣傳をしました。

それと同時に各方面の權威者に對しては、言葉巧みに、
「今は我々が國の中で、同志打をしてゐる時機ではない。

日本は軍備を益々増大しつゝある。それは何の爲であらうか。

日本は前には、臺灣朝鮮を奪ひ、滿洲に侵略した様に應ては我が支那の全國土を奪つて終ふ計畫を持つてゐるのだ。

我々は一刻も早くその實情を認識して、國內の内輪喧嘩を止めやうではないか。

そして力を合せ、國民の力を統一して日本に當る事にしやう。

何と言つても、それが最も急務だ。

それに世界の怖れてゐる、隣國ロシアの共產思想も、何時の間にか我が國に入つて、盛に跳梁しやうとしてゐるから、これをも撃滅しなければならぬ。」

と談じ込みましたので、大概の將軍は皆、その巧言に乗じて、尤もだと感じました。

中には心では嘲り乍ら、

「よき折があつたら、蔣介石を倒し、自分が最高の地位に得やう。

それがためには、蔣介石を助け、日本と一戦交へて、背後の強敵である日本を倒して終へば、

一舉にして我が望みを叶へる事が出来る。」

なごど誇大な妄想を描く、愚かな將軍もありました。

かくして永年あらゆる手段を講じた効果は現はれて、最近になると、支那の此處でも彼處でも、國民の日本人に對する態度が變つて來て、何の理由もなく、日本人を虐めたり侮辱したり、日本の商品を排撃したり、日本人の經營する商店へ來て、亂暴狼藉を働いて、掠奪したり、各地で團體を組織して、物凄い排日運動を行つて、日本人の權益を侵し、日本人に傷害を與へたりして、忍ぶべからざる亂暴を働きました。

これは國民自發的思想ではなく、政府が背後で指導してゐるため遂には大學から小學校に到る迄學生生徒兒童はもとより、老人青年に到る迄悉く排日抗日思想に凝り固つて立上つた、ゆゑ、日本人は努力を盡しても、従前通り支那にあつて、生業を續ける事が出来なくなりました。

かうして支那は、物凄い勢で日本に抵抗し乍ら、ロシア、イギリス、アメリカには、頭を

下げて諂ひ、色々末には國土を取られる様な、無理な條件をも承諾して、飛行機始め、驚く程澤山な軍備を購入して、日本と戦ふ準備を急ぎました。」

正義の魂

「日本は支那のこの愚かな、淺ましい行動を見て、哀れに思ひ、如何にもして、亡國の運命から救ひ度いと、親切の限りを盡して、誤れる政策行動を改め、日本の正義の魂と協力して、永遠安全な國策を樹てやうではないかと懇篤な忠告を致しました。

しかし自我に暗んだ、蔣介石の眼は開かず、益々心は闇に迷ひ、あらゆる方へとさまよひ初めました。

ために日本の正しい言葉は耳にも入らず、正しい態度にも見向きもしません。
唯日本を國土侵略の仇敵として、國民に強く信じさせる様に、仕向けました。

支那には偉大な軍備が出来た。

日本に勝ることも決して劣らぬ。

その上日本は國土も狭く、軍人も少いのだ。

訓練も徹底しては居らぬ。

然るに我が支那は、國土も日本の數十倍を有し、約五億の國民を教育的思想的によく統一して、一つ心に纏め信念を築き上げて来た。

それに従来は、別れ／＼であつた軍閥の各首領も、今は一つ力に結束してゐる。

もう用意は充分だ。

小さな日本位、この力を以て當れば、何の造作もなく、撃滅して終ふ事が出来る。

日本は今、世界各国からも、色々な點で壓迫されて、國の力はひどく弱つてゐる。

國民思想も統一を缺いてゐる。

故に國體の基礎、國民の信念は非常に弱くなつてゐる。

今を逸しては、日本を倒す時はない。

自分勝手の想像をして、自國の力を十倍にも百倍にも見積り、日本の力を百分の一、千分の一位に低く見下してゐますために、この誤つた見方が禍して、今に必ず支那は日本に向つて、

自發的に、何處かで戦火を誘導する事になりませう。

その時初めて、皇軍に天祖様の御稜威が下つて、一大聖戦が、支那の國土の全面的に展開されて、一時は空に海に陸に、物凄い戦鬪の繪巻が繰展げられ、國民は阿鼻叫喚して逃げ惑ひ、

悲惨な苦惱を受けるでせう。

しかし乍ら、これは古代から支那國土を禍して、國民の聰明を奪ひ、不正不自然を繰返し、不幸な境遇に苦しめた、惡魔を膺懲し、自滅するための、聖戦の御稜威であるために、一時は凄愴慘虐な状態を、地上に現はしますが、聽て正しき者の靈は天界に救はれ、國土は清く淨められて、初めて新しき土と變り、民族が永遠に幸福に生存し得る國土となるのであります。

天魔の襲來

「日本と支那との關係につきまして、又聖戰の御稜威に依りまして、支那の全土が清められ改められ、新らしき土に變つて、民族永遠の福祉を約束されるといふ、有難いお言葉を聞いて、非常に嬉しく力強く思ひますが、今の日本は、弱體國の支那よりも、露西亞との關係が最も危険なわけではありませんか。

私共の見た所でも、何時露國と、戦端が開かれるか分らない様な氣が致します。

何時露國の怖るべき飛行機が天魔となつて、日本の空に襲來するかも分らないと思ひますと、一刻も安らかな心はありませんが、この點如何でございませうか。一

「日本は正義人道明らかな國でありますから、露國を攻めに行くといふ考へは毛頭持つてゐないのでございします。

それは誰方も充分御承知の事でございしますわね。

しかしロシアは古代からの民族性として、常に他國を侵略掠奪せすば止まないといふ國でありますから、絶えず東洋亞細亞に魔の手を伸し、機會あらば、國土を奪はんと狙つて居ります。先年滿洲國を、一度支那から奪つたけれど、忽ち日本軍のために、取り返され、ロシア軍は北滿に追拂はれて以來無念に思つてゐますが、日本の國力強いため、再び魔の手を伸す機會がありません。

仕方なく今度は共産といふ思想主義を以て、内面的に潛入して、この惡魔の力を以て純日本魂を奪ひ、眞の忠君愛國觀念朦朧たる輩に手を伸べて、この思想を注ぎ、國體を全面的に轉覆させて、己が豫ての野望を達成しやうと計畫して、巨萬の資金を、數十年に亘つて、投じて來たのであります。

しかし總てこれ等は、天祖の御稜威の力に排撃されて、到底その目的を達する事が出来ないために、今又方針を改めて、全國民を犠牲にしてその血と汗と涙を搾取して、宏大な軍備を調

へ、之を以て東洋歐洲の兩方面を侵略して、世界を我が領土に收めやうといふ、暴舉妄想を夢みてゐるのでございます。

けれども露國內には、先年滅ぼされた、白系露人があり、思想主義を異にする武人、智者、學者も、數多ありまして、内面的に物凄い争鬭を絶えず繰返して居り乍ら、世界に内情の洩れるのを怖れて、厳しく外國人の入國を禁じ、尙自國から外國へ送る通信も、厳しく取締つてゐるために、外國人は總べての事を、知る事の出來ない、秘密國でありますから、詳しい内情は知る由もありません。

日本の皇軍弱くして、一度たりとも支那軍に敗れを取る様な事があれば、その力を見透して、「日本軍怖るゝに足らず。」

と侮り、極東に豫て備へたる大軍を送つて、日本軍と戦ひ、一舉にして東洋の全國土を奪ふ軍略を進めるのは、當然の事でありませう。

しかし乍ら日本軍は、天祖の神秘的御稜威を受けて、戦ふ聖戰であるため、その力は絶對無

限神秘的にして、連戦連勝し、數年を出でずして、支那全土を回復するでせう。

この間露國軍は、多年の計畫の空しく覆される事を無念に思ひ、背後から支那を助け、又時には自國の軍を送る事もありませうが、かゝる時には、一層果敢なる皇軍の神力に撃滅されて、魔の手は自ら、退却し消滅されるのであります。

世界の動向

「よく分りました。

では皇軍に神秘の力現はれ、聖戰に連戦連勝して、支那の全國土を回復すれば、ロシアは怖れて、今迄數年間跳梁した魔の手を引くと有仰るのでございますか。」

「その通りでございます。

しかし乍ら、この世には、虚空に天魔が充滿し、地上にも惡魔が絶えず跳梁して居りますか

ら、これが完全に消滅しないど、悪魔が人間の體に宿り、武器を擲んで、縦横無盡に天地に荒れますから、何よりも先づ悪魔を消滅する事が大切でございます。

「その悪魔を消滅するには、どの様に致せばよろしうございますか。」

「我が天孫民族が、誤れる迷信的信仰を改め、清く正しく、明るく聖大にして、天祖より受けたる真心となり、眞澄の鏡となつて、公明正大に人道を照し、慈悲愛誠の言行一致の徳を尊び、これを行ふ時に、始めてこの悪魔は聖地日本から消滅し、尙皇軍聖戰の進む所、悉く悪魔はその神祕と御稜威の力に抗し難く、殲滅されて、アジアの空に立て籠めた妖雲は、跡方もなく晴れて、皎々たる日月が燦然と輝きます。」

而して亞細亞民族の、永遠の幸福を約束するのでございます。」

「よく分りました。」

何だか心持が、晴れやかになつて、眞から安心出来る様な氣が致します。しかし今後の全世界の動向は、如何でございませうか。

益々日本を壓迫する様な態度に出るのではございませうか。」

「日本弱しと見れば、ロシアと等しく、腕を拱いてじつと見凝めてはゐません。」

必ず日本軍を撃滅して、支那の國土を公然と侵略して、恣に權益を擴め、アジアを擧げて、白色人種の主權としてアジア民族有色人種を總てを、白色人種の奴隸たらしめやうとするのであります。これは如何に齟齬しても、天祖が許し給はぬために、不自然な跳梁は成就致しません。

可なり永い年月に亘つて、聖戰は繰返されませうけれども、必ず最後は東洋のみならず、西洋各國共に、天祖の御稜威に依りて清められ、人類の生命は、眞に清く正しく還元して、最後は世界人類の眞の平和と幸福が明らかに成就されます。

今は世界何れの國民も、天の約束を知る者がないために、各自我が國のみ尊く強いと信じて様々なる國策を樹て、居りますけれども、日本以外に天の定めた主權者はなく、唯地に生れ同じ靈を受けた神の子としての生命が存續してゐるに過ぎません。

それがために、世界人類は、地上に絶対尊き信仰的信念の的として、崇敬する何ものも有しませんが、我が日の本の國は、天祖の御誠意に依り、三種の御神寶を受けて、天降りましまする、皇孫の尊が、神ながらの御神體を持たせ給ひ、現人神として、萬の神の上に輝き給ふ、萬邦無比なる帝國であります。

ために國は神の造り初め給ひし聖地にして、君は神ながらの聖上であり、民は神ながらの天孫民族でありまして、忠孝一本を生命本體としてゐますために、一旦緩急あれば、總て皆その體は神の器となつて、神祕的無限力を發揮致します。故に如何なる力を以てしても、日本の聖地を、外國人の力で侵し汚す事は出来ません。これが絶対的國體の精華でありますから、この事を明らかに、申上げておき度いのでございます。

國民の覺悟

「國體の淵源が前述の様でございますから、天孫民族たる、日本國民の眞使命も自ら、世界各國民族と異り、重大な使命を有してゐるのでございます。

ために日本人は天孫民族として、世界に冠たる、正々堂々たる人格品性の持主であらねばなりません。」

「天孫民族として非常時に生きる、眞に正しい道をはつきり承り度いと存じます。」

「天孫民族として、正しく生きる生き方は、既に天祖様が約束されて居ります。

親は天祖様の使命者なれば、神の慈悲慈愛を以て、よき種となり、よき母體となつて、よき子を生み、その子の世に生れ出で、後は、正しき誠の言行一致に依りて、その子の品性人格を高め、健全なる肉體を育てて、君國の御爲強き力とする事が、親の道でございます。

子は定め給ひし父母より生れ、海山より深く高き温情慈愛に依つて哺み育てられたる恩を思つて、長じてはいよくその心を正しく、體を健やかにして、世の人に尊き存在と、その生命を敬せられ崇められ、親しまれる程の人となり、父母の心を慰さめ、老後を懇ろに養ふ、之即

ち子の道でございます。

嫁しては妻は夫を深く敬し信じ親しみて、よく事へ、假初にも夫の心を離るゝ事なく、常にその影身に添ひて、夫の力を助け志を遂げしめ、よき子を生み育てる事、これ即ち妻の道であります。

一旦娶つた上は、真心から我が者として、慈しみ愛してその心を傷け嘆かせ悲しませる事なく、常に心を楽しく深く自己に信頼し得る様、強く大いなる愛の心を以て、妻の心を抱擁し、一心同體の實を收め、妻が安んじて、その生命を生かし得る力を、與へるのが夫の道であります。

その他子弟の道、主従の道、兄弟の道、朋友の道、總て皆相對する者に對しては、假初にも偽り蔑み罵り、嫉妬虚偽傲慢等の心を生じ、言行を成す事なく、求むるといふ心を持たず、深く信じ慈しみ、愛するといふ、心情を以て交り、終始一貫誠の心を以て對する事、之一般人に對する、人の正道であります。

天孫民族總て、本來天祖の教へ給へる聖道を踏めば、その心身共に假初にも汚れ過ちといふ事はありませんから、常の日に眞生命は赫々として輝いて、國體の威力となつて光ります。

一旦緩急あれば、國民は獨り皇軍に召出されし武夫のみならず、男女老若總て同じ魂となり、心身を清め引緊めて、銃後の守りを嚴かにして、一絲亂れぬ泰然自若たる心情態度を以て、國土を守り、皇軍の士氣を昂めつゝ、常にその身は假初にも罪過ちを犯さず、正しき行を以て身を修め天つ神の神護を祈る、かくすればその至誠天に通じて、神人一體となつて、聖戦は必勝を收め、進んでは世界人類の永遠の幸福を成就する事が出来るのであります。」

聖の御代

寶島に聖教殿を造營して、聖女照代は日々日本全國から、慕ひ集つて、教へを求め人々に、人間生命の本體と天孫民族の使命を懇ろに説き明し、

畏くも天祖、聖上の御稜威に在します、世界全人類萬物の福祉への聖道について、はつきりと説き明します間に、その信念はよく道を求めて集る人々の真心に徹底して、自ら過去の不自然な言行と、軟弱な體質は健全に純真に改り、真に天來の神性に生還して、自ら天祖と、聖上陛下の御寶となつて、聖教を助けますために、數千年來國內に充滿して、人心を迷はせてゐた、迷信的宗教邪教は、次第に消滅して、國土は清淨に改まり、人心は清く明るく、明快となり、國民の肉體は健全となつて、國威はいよ／＼世界に光り輝き初めました。唯人心を以て想像も及ばない神祕に、驚異の眼を、總ての人が瞠るのは、最初聖教殿を造築した時は、僅かの面積の島であつたのが、僅か二年三年の後には、次第に島が水面上に浮出で、今は二倍餘の廣さになつた事であります。

聖女照代の姿はいよ／＼神々しく、その瞳は神の如くすが／＼しく輝いて、最初道を求めて聖教殿に類いたものは、まともに見上げる事の出来ない程の神格が備つて居ります。

照代の説く教へについては、何人も異議を唱へる者はなく、皆真心に受入れて清き眞の信仰

的信念生活への導きを感謝せぬ者はありませんでした。

唯寶島の日々海に浮出で、來る真相について、尋ねた時だけは、照代は微笑んで、「今にお分りになる時が参ります。」

日の本は誠の根の國底の國で、天の御柱立ち榮ゆる神國でありますから、何時までも、小さな島國ではありません。

親國に代る神祕が現はれ初めたのでございます。」と嚴然と答へるのでした。

(終り)

筆を擱くに當りて

眞生命の光の稿を終へて、擱筆致しますに當り、謹んで本書を御愛讀下さいます諸賢に御挨拶申上ります。

本書は巻頭の辭に申述べました如く、七月十八日惠那郡陽光ヶ丘の峯に祈願所を設け、
聖壽萬歲國威宣揚皇軍武運長久聖戰必勝

の大祈願を行ひました際、誠に不思議な神祕を受けましてから、靈氣満ちて約八日間に、本書を記述致しました。

ために文章の草案を自ら練るといふ様な事は全然致しません、唯自然に魂から迸り出る思想が筆の先に現はれたのでございますから、本書に現はれて居ります、聖女照代は、私の觀念的理想の人の様でもあり、又幻の中の聖女でもあるのでございます。

しかしこの照代を通して説明して居ります教へは、決して私の自我的感想ではなく、自然から来た目に見えぬ大きな力が、靈體に現はれて、筆の先に迸つて出た文字であり、言葉でございませうから、文章の纏つて居りませぬ點は、著者の修養淺く、文學的の力に缺てゐるためである事を、御了恕下さいまして、人間生命の眞理の存する個所は、天祖の御惠徳として、御信念下さいませう様、謹んでお願い申上ります。

尙本書を御愛讀頂きますに當りまして、特にお願い申上げ度いと存じますのは、照代の生立の巻より、聖女として寶島に聖教殿を造營して、眞理を説き初めます迄は、現實でなく、想像架空のものでございまして、照代をして、眞の正しき、神ながらの日本國體の精華、天孫民族の眞使命、世界人類の最後の福祉を統べ給ふ
天祖と聖上陛下の、世界遍照の御稜威の尊嚴を、明らかに説き明させるために現はれた聖女でありますから、本書の目的生命は聖教の巻にある事を、御承知下さいまして、特に聖教の巻を御熟讀賜ります様、お願い申上ります。

終りに臨みまして、本書を御愛讀下さいませう皆様方の、永遠の御幸福をお祈り申上ります。

昭和十二年盛夏

龍子記す

忠誠婦徳會發行の書籍

<p>の日本婦人 使命と 其の修養 (賣切)</p>	<p>片桐龍子著</p>	<p>定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)</p>
<p>宗教小説 天界地界前編 (賣切)</p>	<p>片桐龍子著</p>	<p>定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)</p>
<p>宗教小説 天界地界後編 (賣切)</p>	<p>片桐龍子著</p>	<p>定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)</p>
<p>理想小説 眞珠の塔 (賣切)</p>	<p>片桐龍子著</p>	<p>定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)</p>
<p>事實談 烈女の鑑 (賣切)</p>	<p>中田武雄著</p>	<p>定價金壹圓 (郵稅拾錢)</p>
<p>教育小説 輝く道 (賣切)</p>	<p>片桐龍子著</p>	<p>定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)</p>

理想小説 心の華 (賣切)	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)
皇軍慰問日記 國境を越えて (賣切)	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)
家庭小説 姫かゝみ (賣切)	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)
國華寶典 心身健康秘録	皇華聖道會編	定價金參圓 (郵稅拾貳錢)
國華神道 萬壽華	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)
信仰小説 微笑	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)
教育小説 黎明ヶ丘	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)
皇華聖道寶壽	片桐龍子著	定價金貳圓 (郵稅拾貳錢)

教育修養雜誌

御國の華

定價一部 金拾貳錢
一ヶ年前納 金壹圓貳拾錢

本誌は一般地方青年處女又主婦の處世及び家事百般の常識修養雜誌として毎月一回(十五日)發行致して居ります。本誌は普通の雜誌社發行の趣味雜誌とは、全然内容を異に致しまして精神修養並に實際の常識指導を目的使命として、獻身的に努力致して居ります。今後重大な國家社會のため、又家庭の一員として完全なる使命を果し、人生最大の幸福を得んと望まれる方は、是非本誌を御愛讀下さる事を御勧め致します。

岐阜市田生越町

發行所

忠誠婦徳會

編輯者

片桐龍子

電話二三三四五番
振替口座名古屋一六三九〇番

教育修養雜誌

道の華

定價一部 金拾貳錢
一ヶ年前納 金壹圓貳拾錢

本誌は御國の華と姉妹誌にて、創刊以來常識修養雜誌として、毎月一回（一日）発行致して居ります。本誌は親愛なる讀者の皆様の、真心の生命の糧として、勇氣となり、智慧となり、力となり、慰安者ともなつて、品格人格を向上して頂く為の杖となり、常識を極めて頂く道しるべとなる事を目的使命として、力強く編輯して居ります。皇國非常時局に際して、皆様の眞の生命が、勇往邁進される為めの好伴侶となりして、是非御愛讀下さる様お願い申し上げます。

發行所

岐阜市田生越町

編輯者 忠誠婦徳會
片桐龍子

編輯者

片桐龍子

電話二三三四五番
振替口座名古屋一六三九〇番

昭和十二年十一月三日印刷
昭和十二年十一月十日發行

定價 金貳圓

郵税 拾貳錢

著者 片桐龍子

發行所 岐阜市田生越町

片桐龍子

發行所 岐阜市七軒町十二番地

河田貞次郎

印刷所 岐阜市七軒町十一番地

西濃印刷株式會社
岐阜支店

岐阜市田生越町

忠誠婦徳會

電話 二三三四五番
振替口座名古屋一六三九〇番

不許
複製

發行所

終